

柴田 邦臣 (SHIBATA Kuniomi)

1973 年生まれ。専門は、福祉情報論、ICT メディア研究、社会情報学。2003 年 3 月、博士後期課程修了後、日本学術振興会特別研究員 (PD)、東北文化学園大学医療福祉学部非常勤講師 (保健福祉情報論) を経て、大妻女子大学社会情報学部専任講師 (現職)。

専門分野

ICT(Information Communication Technology) を活用したメディアの社会的な影響や、その利用のあり方 (リテラシー) を検討した理論を学びつつ、具体的にメディアを利用する場としての、障害がある (とされる、する) 人たちの実践についてをフィールドワークしてきました。今は、主として 3 つの領域に的を絞って勉強しています。

主要業績

論文・著作・書籍など

- ・柴田邦臣・徳田律子, 2007, 「福祉用具・住環境の活用のための人材育成」福祉用具活用研究会編著『高齢者・障害者のための福祉用具活用の実務』4801-4912, 第一法規。

: 実践的な「福祉情報」論をめざして書いてみたものです。福祉専門職の人が用具や AT について学ぶために、ないしは情報を入手するためにどうすればいいのかわ、逐一網羅していったら、なんだか思わぬ力作? になってしまった、みたいな作品だと思ってます。依頼したのか? されたのか? って感じではじめたのですが (笑)。ちなみに、原稿料ってのははじめてもらいました。これまで書籍は印税 = 借金だと思ってたので、びっくりしました。

- ・柴田邦臣, 2006a, 「情報弱者の社会参加 障害者の ICT 利用と“自立”をめぐる」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要 社会情報系) 15』76-88。

: めずらしく自分の専門を、ストレートに書いてみました。一番の売りは、日本における「社会参加」の過程を、【第一期 = 意志決定への参加】、【第二期 = 社会的な活動への参加】(この分類はある程度広く受け入れられてると思いますが) に対して、【第三の参加 = 自立とセットの参加】っていうのを措定しようとした点です。もちろん例の“自立支援法”の影響を受けてます。そしてそれに ICT を絡ませたらどうか、、時間が無くてしっかり書けなかったので紀要落ち。しっかり続きを書くべく準備中です。

- ・皆吉淳平・柴田邦臣, 2006, 「若年女性の投票行動と新しいメディア 第 44 回衆議院選挙のアンケート調査から」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要 社会情報系) 15』89-111?。

: 2005 年の郵政選挙の結果に、やっぱりびっくりして、「本当に目の前の女子大生 = 若年女性は、そこまでマジで保守化? してるのか?」ってアンケートした結果をまとめたものです。統計に自信がないのでもちろん共同研究で。結論としては、「保守化」でも「小泉劇場に踊らされた弱者」でもなく、「家族回帰」なんだろうな、ということでした。みんな、家族や口コミでそれなりに相談して、考えて、投票してるんですね。変化しているのは、政治意識とかじゃなくて、「公」-「家族」-「私」の境界線なんじゃないか。ちなみに分析過程を同時並行で授業で話したら、学生のみなさんに大うけでした。社会学教育って、こうあるべきなのかも。

- ・柴田邦臣, 2006b, 「メディア・リテラシー 社会に参加する知の積層」早坂裕子・広井

良典編,『みらいに架ける社会学 情報・メディアを学ぶ人のために』47-63, ミネルヴァ書房.

:そもそも学問(できてませんが)をめざすきっかけだったメディア研究(マスコミでない)を、現在取り組んでいる福祉情報論(具体的には、障害のある人がメディアを使う場)に結びつけるきっかけとして書いてみました。と同時に、メディアの社会的意義を問うという、自らの出発点を確認できた力作のはずが、大誤植が~(涙)。改版のために、結構必死で一人販促をしています。売れなくてもいいから改版して欲しい。

節立: 1. メディア・リテラシーの現在 2. メディアの基礎論 3. メディアを使おうとする場から 4. 社会参加のためのメディア・リテラシー

- ・柴田邦臣・金澤朋広, 2004, 「福祉 NPO における『支援』のあり方 障害者福祉での電子ネットワークの諸相」, 川崎・李・池田編『NPO の電子ネットワーク戦略』35-70, 東京大学出版会.

: 利用者が、メディアを利用するためには、まずメディアを獲得しなければなりません。ハードとしても、ソフト(リテラシー)としても。障害のある方の支援をしていると、そういう当たり前の事実があまり論じられてない気がして、その事を書きました。東大出版で書かせてもらえるなんて、いい記念だったなあ~と思っています。もう少し売れるといいのですが。私はだいぶ売りましたが(笑)。 節: 1. 「障害者」と電子ネットワーク 2. 身体障害者における電子ネットワークの「獲得」 3. 障害当事者のメディア獲得戦略 4. 獲得を支援しうるか - 福祉 NPO に問われるもの ほか

- ・柴田邦臣, 2004a, 「ボランティアの“技法” 障害者福祉領域でのパソコン・ボランティアから」『社会学年報第 33 号』69-92, 東北社会学会.

- ・柴田邦臣, 2004b, 「情報・メディア・プライバシー」, 早坂裕子・広井良典編『みらいを拓く社会学 看護・福祉を学ぶ人のために』157-176, ミネルヴァ書房.

: 学生向けテキストのくせに、「メディアの歴史変遷を、利用者という視点から概観する」という野望を立て、結局自分の勉強にしかならなかった、という顛末のものです。分不相応のことをするものではないです(涙)でも、継続的に売れているようで、すでに第4刷?までいってます。社会学を専門とする人がいない福祉系の学部も多いということで、そこにターゲットを絞った戦略が功を奏したようです。編者のお二人の慧眼ですね。本当に、福祉系の知らない学会とかでも、名前が出てたりしますから。売れるのだけが目的ではありませんが、やはり多く読んでもらえるのはうれしいものですねえ。

ここから先は古いので、コメント無し。

- ・柴田邦臣, 2002, 「障害者福祉におけるコミュニケーションメディアとしてのコンピュータ 身体障害者におけるメディアの「獲得」と「利用」をめぐって」『社会学年報 31 号』101-118, 東北社会学会.

- ・SHIBATA, Kuniomi, 2002, Analysis of “Critical” Approach in Media Literacy-Comparative Studies between Japan and Canada-, Keio Communication Review 24, 93-108, Institute of Media and Communications Research.

- ・柴田邦臣, 2001a, 「メディア・リテラシーの“成功”と現実 カナダに見る背景」『社会学年報 30 号』119-147, 東北社会学会.

- ・柴田邦臣・池田緑・李ヤンヤン,2001,「『電子ネットワーク』分析序論：インターネットの資源化とその評価についての指針」『電子ネットワークと市民社会・市民文化形成第2分冊』270-282,電子ネットワーク研究会.
- ・柴田邦臣・倉沢亜己・池田緑・金澤朋広,2001,「NPOにおける電子ネットワーク利用実態調査についての概要」『電子ネットワークと市民社会・市民文化形成第2分冊』363-382,電子ネットワーク研究会.
- ・柴田邦臣,2001 b,「NPOにおける電子ネットワーク利用の評価とネット利用環境：積極的利用としてのMLに必要なもの」『電子ネットワークと市民社会・市民文化形成第2分冊』383-392,電子ネットワーク研究会.
- ・李ヤンヤン・柴田邦臣・池田緑,2001,「『電子ネットワーク分析』への一試論 インターネットと社会参加の関連性を中心に」『メディアコミュニケーション51号』95-109,慶應義塾大学メディアコミュニケーション研究所.
- ・金澤朋広・池田緑・柴田邦臣,1999,「BBS利用における自分らしさと他者の認識」『電子ネットワークと市民社会・市民形成第1分冊』84-95,電子ネットワーク研究会.

リンク

- ・ [大妻女子大学社会情報学部 社会生活情報学専攻](#)

研究カテゴリ